

門遠 13
號 2208
卷 //

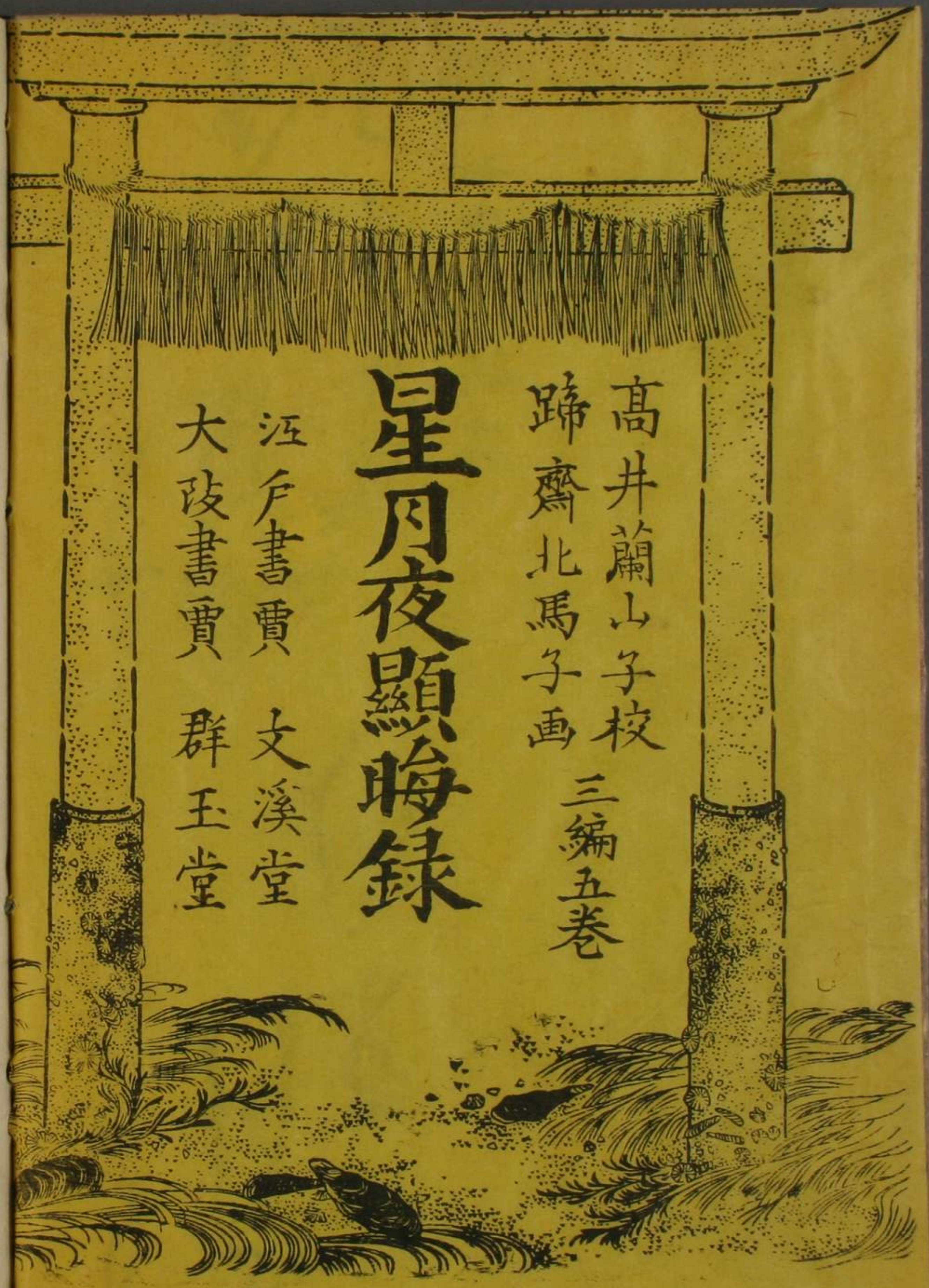
高井蘭山子校
蹄齋北馬子画
三編五卷

星月夜顯晦錄

五戶書賈 文溪堂
大政書賈 群玉堂

序

顯晦錄一二篇稿成時。有客閱之。歎曰。近
間綴狂言綺語。交画者。刊布頗多。惟其
虛足惑。低其竇。至失蹤。足下亦此于此事。
勞心力。費紙筆。果何意乎。竊為子所不
取也。惟恍對曰。固非所冀。書肆屢促之意。
帝有償其需。而請以此篇說之。看官若以此
條之奸邪。則可知眾所惡。以和田之忠正。則
可知眾所義。且以阿監松鳴之殺身。歎真為



可警彼以盛衰改節以存亡易心。矯奔失操
之婦女。是乃我意耳。積鄙陋之言。問卷
之詰為文。其間雖有所取舍。然如狂善為
惡。以非為是。新無之也。暫不闡虛實。偏
備兒女之教誨。後者何求。實於裨史乎。為
客唯。直以斯誌。少者首云。
文政庚辰初秋 高井伴寬思明述



星月夜頭晦録三篇 總目次

卷之壹

○實朝卿所直夫斷朝親公業和平よ及ぶ

圖傳の族侍所よ及ぶ圖

小麻島橋次左衛門公業女とて返と必

○朝親公業再合戦を企て益夫断よ依く和平

藏人朝親怒り妻女を斬しむる図

○實朝卿公事所松よ内奏を禁せしむ

七藏谷の民家小強盜旅客を殺し財を奪取

卷之貳

○和田義盛政道の治乱を演説

義盛地頭代が罪を免と囚

駿河局法令の為よ自殺の由

○善哉九落飾義盛大江廣元忠棟を發せ

善哉九落飾一あつ囚

禪師公曉浄上京の由

○義盛遠慮公曉を殺さんと謀る

大江廣元の亭よ義盛精忠を演る囚

卷之三

○廣元忠義の為よ自罪を負く閑居を

実朝卿の御所へ尼公より使者を向らる囚

尼公の御所よ廣元口上を中並る囚

○相摸次郎朝時女色を好局松島朝比奈秀を慕と

お摸次郎朝時局松島へ艶書を送る囚

○局松島逐電朝比奈信情を施し不審を感る

朝比奈所よ忍入朝比奈よ見頭する囚

朝時局松島を誘出し再び朝比奈よ入取する囚

卷之四

○次郎朝時兄の棟上随く自罪を祈ふ

式部丞泰時隱密に舎弟朝時を礼明の圖

局松島御所より返る圖

○実朝卿局松島を以て朝比奈幸秀に賜んとす

兼時父義時を争棟上

○尼公嫉妬局が縁談を妨げ却て朝時を嫁せんとす

局松島尼公の前より貞女の道を演説圖

卷之五

○局松島自害して貞操を立義秀再御疑を蒙

局松嶋書置侍女賤機へ遺言せし圖

其二

○和田一族九十餘輩閉居武將英智決断

朝比奈三郎義秀と御所へ伴へし圖

○泉小次郎親平隱謀義時を誅伐せんと欲す

館四郎政久萩生右馬允常一闘諍の圖

阿静坊安然法師説客と肯図

總目畢

和田左衛門尉義盛
 桓武天皇後胤村岡小五郎忠通四代
 三浦大助義明力孫松平下太郎義宗
 嫡男三浦一黨棟梁頼朝卿
 鎌倉草創功臣三代君三仕
 老臣三列諸士別當
 智仁勇兼忠義無雙
 外云北條家非法
 堪難
 竟
 謀叛
 建保
 元癸
 酉年五月
 三日戰死
 六十七歲

開邦元老
 忠良臣拭淚
 還稱謀叛名



義作藏人朝親
 其姓源氏一流ヲ汲頼朝卿ノ
 末年ニ若冠ニシテ近侍シ
 諱ノ一字ヲ賜フ和田ノ
 一族ノ女ヲ妻トス
 愛妾ノ故ニ合戦ヲ企
 所領ヲ減セラレ
 後世ニ羞ヲ貽ス

一朝念戾
 擔于戈
 千歲笑譚
 貽耻愧



小鹿嶋橘次左衛門公業
 敏達天皇後胤ニシテ并出左大臣
 諸兄公ノ庶流ニテ橘右馬允
 公長ト云ハ新中納言
 知盛卿ノ家人ナリシガ
 治承四年頼朝卿ニ隨
 其次男公業也
 父子弓馬達人
 義作藏人ト合
 戦ヲ企義盛ガ
 計ニ和義ニ
 及ベリ
 弓馬
 鎗且
 勇名堪稱
 幕府干城臣



駿河局
 駿河国富士郡ナル
 輕キ士ノ女ナルガ
 幼ヨリ尼御堂ニ
 近侍シ阿監首ガ
 サセル方名ナシト
 云凡憲法ノ爲ニ
 克一命ヲ極
 丈夫ニ愧サル
 處アリ
 将来
 憲法比
 磐石今日
 殺身
 如髮毛



北條式部兼奉時
北條相摸守平義時嫡男
肇江間太郎頼時ト稱ス
父祖ノ邪行ヲ悲屢諫争ス
北條九代ノ榮此人ノ賢良ニ
依所也後執權ヲ繼
武藏守ニ任々仁治三
壬寅年六月十五日卒
六十歳

寛仁
度量長者風
士民億兆
浴恩澤



相摸次郎朝時
北條義時ノ次男若年頃
好色ニシテ行ヲ失スト云
兄恭時賢良ノ諫ニ
依テ道ヲ守
後名越式部照ト
稱シ受領シテ
遠江守承久三
辛巳年北陸
道ノ大將トシテ
官軍ト戦フ
此人子孫連
綿シ川田
名越等ノ祖也

經云過則勿憚改
從事于斯丕克終





朝比奈三郎義秀
和左衛門尉平義盛三男母八巴剛勇無雙ニシテ
而信義忠孝ヲ專且風流ヲ好母ニ似テ容色美麗
ト云リ建保元年和田合戦ノ時
怪カラ躡シ敵ヲ討テ
數千對揚スル者ナシ
一門滅亡後房州ニ渡
又外域ニ入ト云リ

能挾泰山超

北海小心

翼之冀

賢良



威武難徒烈婦情

一時節操

拋身命

松嶋局

佐渡守親泰女實朝卿ノ御臺所ニ從
鏡倉ニ下御所ノ女官多朝比奈義秀
妻タランコトヲ約シ志ヲ果ス自刃及ニ伏テ
貞婦ノ操ヲ顯シ英雄ヲ悲泣セシム

館四郎政久
救生右馬允常一
館大職冠鎌足公後胤
奥州伊達郡ノ住人救生ハ
嗟峨源氏ノ庶流東國ノ
武士也暫時ノ口論ニ
家ヲ失フ君子ノ
取サル處也

朝列袖
交思
斷金
夕争
希敵
以刃劍



松嶋局之侍女賤機
洛外農家ノ女也卑賤ヨリ出タレ
松島ガ死後マテ忠貞ヲ盡セリ



國家傾敗知忠臣
匹婦處艱能見貞

全

部

總

括

初編

鎌倉二代頼家卿武將小備多し。梶原景時隱謀且諸士の許小鎌倉と逐之滅亡。番場忠太が智辨武略城負盛越後国鳥坂籠城佐々木盛綱入道が武功に依て静謐浅利与市坂額の俘と申九妻と終

二編

頼家卿御狩。勇士小命。伊東之崎の洞中富士の人穴と隠れ比企義員滅亡北条の室牧の方奸悪頼家卿生害三代實朝卿武將小備多し。畠山重忠佞臣の邪計小滅亡。和田北条と不快朝親妾の夏より公業と合戦と企終

三編

由利惟久憂心隱謀露頭在柄胤長面縛せられ義時と問答。尼公即智

四編

決断在柄流刑小處。義盛北条と亡さんと計。和田朝盛諫言並剃髮。三浦義村憂心。義盛出陣。御所西北西門軍。義秀恠力惣門と破勇戦小終

五編

朝比奈仁義に感。敵を助るより。和田内所々軍。義盛滅亡義秀房。及小渡實朝卿入宋の望大船と造。右大臣拜賀の為鶴岡へ社奉。禪師公曉不弒られ公曉伏誅頼經京より下向天下静謐小至と大尾と

星月夜頭晦録三篇卷之壹

目錄

○實朝卿御直矢断朝親公業和平よ及ぶ

岡埜の族侍所よ及ぶ

小原島橋次左衛門公業女を返と因

○胡親公業再合戦と企義盛矢断よ依る和平

藏人胡親怒る妻女を斬しむる因

○実朝卿公事折松内奏を禁じし

大藏谷の民京に法盜旅客を殺し財を奪因

星月夜頭晦録三篇卷之壹

实胡卿御直夫断胡親公業和平よ

夫智仁勇と三徳と稱し実上此三徳と兼備する将を以て
覇業を成とす智と以て化を伏せ仁と以て化を憐し勇
と以て化を恐懼せし且信義親愛家族より一統よ及び門業
廣くんと希ふ根を深く一帯を固くする所以とす凡そ
元と毫し一人と云く信を施し帰伏せし是が近かり眷屬は
類自己の手足の如く遠く四海の人々皆親しんことを求め門下
よ群集し一族のありひとるを將する者思ふんば有るべき
小鎌倉三代のあり奮功を積む和田左兵衛尉義盛と三浦の棟
梁と一族廣く然も智仁勇と兼備侍所の列當ありとす



諸士を指揮するに依るに事裁判は致さども一點の私多く諸人
 由伏る致さども小条家の権威小妨ら真忠の實を致さども
 然るに自ら自然と両家互に相拒ぶ威を争ふに至る迄古より
 兩雄並び立ぐ龍虎互に屈せざる譬のごとく然るに小条和田
 の君と自ら自邪正頭晦あり小条家付の斗ふ如く和田益益が否拒
 るの理をわづらふと終に支へぬと致さども和田が如く小条
 が妨るる邪を合む毎に制しぐらふに致さども和田が如く小条
 絶む和田を傾く意恨を晴さんと欲らば承元三年十二月
 美作藏人胡親小麻島橋次左門公業と妻のりより不付の合
 戦と企む胡親が方より妻の縁ありより三浦の一黨方人と
 群系と和田益益の内縁ありども諸士の別當と依怙の

ゆたろく事理を執る小麻島が味方と稱し騷動を静めんとす
 如く小条家時系の前を於て争ひ益諸人とす方人とす
 騷動せしむるの云上りいふ実胡々直ぐ夫即ちなりんとす
 争論人ありび群系の筆を御所へ系づるの正下知る是に
 乞必小条が中掠む如くんとす諸士を引連御所は系上
 下より系とす双方の意を尋問くハ藏人胡親隠さるる
 るの如く妻を失ひて公業隣家にあるが拘居小して右
 の次第よびとびいと中上小麻島公業の女をひ來り始終
 を中上流人密夫あぐ中以上よりその汚名を雪ぐんとす
 仕合しと折へたる系は召置夫式の事より一族を催
 し合戦を企む騷動よぶる頗不忠に似たり殊さう諸士



列當たる者益々盛ん。俱々味方加勢を欲し、稱し、動乱を母む。何者ぞや。所存もあらず。その者もやと宜ひ。其の者益々承り。何者ぞ。左振の身を清く。其の者益々。稱士を預る。其の者益々。非常と静る。其の役。其の由へ。強動のよき。承り。其の者益々。上る。其の者益々。早速。其の場へ。馳至り。其事を。相ひ。其の者益々。今度。其の者益々。前。其の者益々。例。其の者益々。殊。其の度。其の者益々。一族。其の者益々。親。其の者益々。赤。其の者益々。命。其の者益々。交。其の者益々。縁。其の者益々。り。其の者益々。朝。其の者益々。親。其の者益々。味。其の者益々。方。其の者益々。と。其の者益々。稱。其の者益々。し。其の者益々。馳。其の者益々。集。其の者益々。る。其の者益々。よ。其の者益々。き。其の者益々。を。其の者益々。法。其の者益々。めん。其の者益々。ら。其の者益々。早。其の者益々。速。其の者益々。に。其の者益々。向。其の者益々。ひ。其の者益々。その。其の者益々。自。其の者益々。振。其の者益々。を。其の者益々。尋。其の者益々。ね。其の者益々。し。其の者益々。朝。其の者益々。親。其の者益々。が。其の者益々。誤。其の者益々。り。其の者益々。ま。其の者益々。よ。其の者益々。ら。其の者益々。ず。其の者益々。を。其の者益々。省。其の者益々。ち。其の者益々。平。其の者益々。定。其の者益々。せ。其の者益々。し。其の者益々。めん。其の者益々。と。其の者益々。存。其の者益々。じ。其の者益々。ま。其の者益々。ど。其の者益々。も。其の者益々。非。其の者益々。道。其の者益々。よ。其の者益々。ま。其の者益々。と。其の者益々。存。其の者益々。じ。其の者益々。ま。其の者益々。一。其の者益々。黨。其の者益々。よ。其の者益々。下。其の者益々。知。其の者益々。し。其の者益々。て。其の者益々。公。其の者益々。業。其の者益々。が。其の者益々。味。其の者益々。方。其の者益々。が。其の者益々。る。其の者益々。と。其の者益々。合。其の者益々。戦。其の者益々。を。其の者益々。あ。其の者益々。り。其の者益々。ふ。其の者益々。よ。其の者益々。り。其の者益々。ど。其の者益々。不。其の者益々。念。其の者益々。の。其の者益々。狼。其の者益々。籍。其の者益々。を。其の者益々。仕。其の者益々。せ。其の者益々。し。其の者益々。た。其の者益々。為。其の者益々。る。其の者益々。け。其の者益々。既。其の者益々。し。其の者益々。朝。

親戦といふ。一。其の者益々。が。其の者益々。と。其の者益々。一。其の者益々。黨。其の者益々。却。其の者益々。る。其の者益々。公。其の者益々。業。其の者益々。を。其の者益々。助。其の者益々。る。其の者益々。也。其の者益々。業。其の者益々。り。其の者益々。お。其の者益々。違。其の者益々。し。其の者益々。彼。其の者益々。と。其の者益々。及。其の者益々。ぶ。其の者益々。け。其の者益々。ら。其の者益々。し。其の者益々。今。其の者益々。一。其の者益々。度。其の者益々。矣。其の者益々。見。其の者益々。を。其の者益々。加。其の者益々。へ。其の者益々。ゆ。其の者益々。り。其の者益々。と。其の者益々。存。其の者益々。る。其の者益々。如。其の者益々。へ。其の者益々。大。其の者益々。令。其の者益々。の。其の者益々。所。其の者益々。候。其の者益々。を。其の者益々。賜。其の者益々。り。其の者益々。左。其の者益々。右。其の者益々。よ。其の者益々。か。其の者益々。ら。其の者益々。ど。其の者益々。同。其の者益々。道。其の者益々。仕。其の者益々。る。其の者益々。如。其の者益々。よ。其の者益々。一。其の者益々。族。其の者益々。を。其の者益々。離。其の者益々。し。其の者益々。小。其の者益々。麻。其の者益々。島。其の者益々。を。其の者益々。ら。其の者益々。ひ。其の者益々。し。其の者益々。り。其の者益々。依。其の者益々。姑。其の者益々。を。其の者益々。存。其の者益々。じ。其の者益々。ね。其の者益々。ま。其の者益々。が。其の者益々。斗。其の者益々。ひ。其の者益々。し。其の者益々。ゆ。其の者益々。美。其の者益々。ず。其の者益々。と。其の者益々。合。其の者益々。戦。其の者益々。を。其の者益々。助。其の者益々。人。其の者益々。り。其の者益々。弟。其の者益々。よ。其の者益々。ら。其の者益々。甲。其の者益々。冑。其の者益々。の。其の者益々。用。其の者益々。意。其の者益々。も。其の者益々。仕。其の者益々。る。其の者益々。べ。其の者益々。き。其の者益々。承。其の者益々。り。其の者益々。つ。其の者益々。と。其の者益々。人。其の者益々。使。其の者益々。る。其の者益々。政。其の者益々。し。其の者益々。強。其の者益々。着。其の者益々。高。其の者益々。等。其の者益々。も。其の者益々。跡。其の者益々。も。其の者益々。系。其の者益々。も。其の者益々。ど。其の者益々。も。其の者益々。惣。其の者益々。く。其の者益々。帝。其の者益々。服。其の者益々。る。其の者益々。も。其の者益々。あ。其の者益々。ら。其の者益々。し。其の者益々。ゆ。其の者益々。も。其の者益々。言。其の者益々。ひ。其の者益々。し。其の者益々。ま。其の者益々。を。其の者益々。方。其の者益々。人。其の者益々。ら。其の者益々。ら。其の者益々。の。其の者益々。所。其の者益々。不。其の者益々。審。其の者益々。を。其の者益々。入。其の者益々。り。其の者益々。い。其の者益々。う。其の者益々。へ。其の者益々。彼。其の者益々。兩。其の者益々。人。其の者益々。が。其の者益々。共。其の者益々。に。其の者益々。あ。其の者益々。り。其の者益々。し。其の者益々。て。其の者益々。仰。其の者益々。せ。其の者益々。ら。其の者益々。是。其の者益々。と。其の者益々。ら。其の者益々。し。其の者益々。と。其の者益々。上。其の者益々。り。其の者益々。い。其の者益々。は。其の者益々。君。其の者益々。和。其の者益々。田。其の者益々。が。其の者益々。云。其の者益々。梧。其の者益々。し。其の者益々。誠。其の者益々。を。其の者益々。取。其の者益々。ら。其の者益々。し。其の者益々。と。其の者益々。所。其の者益々。感。其の者益々。有。其の者益々。り。其の者益々。兩。其の者益々。人。其の者益々。が。其の者益々。争。其の者益々。論。其の者益々。よ。其の者益々。か。其の者益々。わ。其の者益々。く。其の者益々。い。其の者益々。向。其の者益々。後。其の者益々。双。其の者益々。方。其の者益々。一。其の者益々。云。其の者益々。も。其の者益々。衆。其の者益々。を。其の者益々。と。其の者益々。べ。其の者益々。り。其の者益々。以。其の者益々。強。其の者益々。動。其の者益々。し。其の者益々。て。其の者益々。罪。其の者益々。を。其の者益々。免。其の者益々。れ。其の者益々。り。其の者益々。あ。其の者益々。ら。其の者益々。し。其の者益々。ら。其の者益々。公。其の者益々。業。其の者益々。を。其の者益々。め。其の者益々。り。其の者益々。朝。其の者益々。親。其の者益々。よ。其の者益々。返。其の者益々。さ。其の者益々。へ。其の者益々。し。其の者益々。朝。其の者益々。親。其の者益々。を。其の者益々。捕。其の者益々。ら。其の者益々。る。其の者益々。人。其の者益々。と。其の者益々。其。其の者益々。恨。其の者益々。の。其の者益々。と。其の者益々。以。其の者益々。速。其の者益々。と。其の者益々。和。其の者益々。平。其の者益々。し。其の者益々。兩。其の者益々。人。其の者益々。と。其の者益々。其。其の者益々。志。其の者益々。を。其の者益々。結。其の者益々。す。

星月夜三編卷之八

効びいと仰出させ一々二人左右中上よりあはれど長門よりは
願幸し。御礼を申上り退去し。和田兼盛も其の出来ぬ仁恵の
不感トもなむ。けるも然るに決りたるもあつと。いふも其の
下知あるへ。再改めしと及びと。あひ俱し所を退出せし。又
群衆の車馬も悉くを民部太傅行光をせし。以後私の好む人
方人々。一々射あふ。あはれぬの理非をいふ。可帯を復収せし。一
と仰出させしと。いふ面くは答もも逢人と。恐怖して在る。一
く仁恵の言命あり。有るは。汝に社合せし。いふ勇を退出
せし。いふは。胡親公業ま人の命よ。いふ。岡陣を止め小森島
より。いふ。仲の女と返を約束し。いふ。元来公業不時。いふ。如の女も
ハ。拙公とのまへへ。いふ。胡親が母と笑ふ。いふ。面白く。いふ。

と宿所より。いふ。女を胡親が許へ。いふ。返し。いふ。胡親が
こと息慕のまひ。いふ。ゆる。いふ。か。いふ。合戦の用。いふ。合戦の
果憎。いふ。流石。いふ。女を害し。いふ。捨人。いふ。と。いふ。
先女を指取以前の部屋に入。いふ。翌日。いふ。女再び。いふ。送電。いふ。
勝志。いふ。胡親大子。いふ。怒り。いふ。公業。いふ。一合。いふ。合せての。いふ。あ。いふ。
あひひ。いふ。へ。いふ。非。いふ。憐。いふ。散。いふ。と。いふ。合戦の用。いふ。いふ。
いふ。公業。いふ。企。いふ。夢。いふ。胡親。いふ。水。いふ。侮。いふ。ろ。いふ。く。いふ。命。いふ。子。いふ。背。いふ。こ。いふ。再。いふ。び。いふ。合。いふ。戦。いふ。子。いふ。及。いふ。ん。
いふ。こ。いふ。ろ。いふ。る。いふ。奈。いふ。奇。いふ。怪。いふ。の。いふ。次。いふ。弟。いふ。と。いふ。る。いふ。も。いふ。と。いふ。の。いふ。儀。いふ。あ。いふ。は。いふ。渠。いふ。と。いふ。求。いふ。為。いふ。常。いふ。の。いふ。勝。いふ。員。いふ。を
いふ。夫。いふ。一。いふ。他。いふ。人。いふ。の。いふ。強。いふ。動。いふ。あ。いふ。る。いふ。と。いふ。いふ。と。いふ。侯。いふ。者。いふ。を。いふ。め。いふ。ら。いふ。と。いふ。の。いふ。旨。いふ。を。いふ。申。いふ。さ。いふ。す。
いふ。是。いふ。ハ。いふ。胡。いふ。親。いふ。公。いふ。の。いふ。返。いふ。答。いふ。し。いふ。既。いふ。ニ。いふ。両。いふ。軍。いふ。の。いふ。合。いふ。戦。いふ。が。いふ。し。いふ。る。いふ。と。いふ。ら。いふ。如。いふ。何。いふ。一。いふ。く。いふ。いふ。え。いふ。ら。いふ。ん。いふ。小。いふ。茶。いふ。平。いふ。時。いふ。を。いふ。知。いふ。く。いふ。舍。いふ。弟。いふ。付。いふ。房。いふ。を。いふ。め。いふ。ら。いふ。と。いふ。ら。いふ。双。いふ。方。いふ。を

宥め戦ひを止す世を至るものから出仕よ及びたり

胡親公業再合戦と企み益夫断り依り和平

こゝも小茶茶時実胡卿へ云上りくるハ胡親公業を命に差しえも

騒動よ及人として以茶茶培同防の振舞その罪免しごとく中け

羊々公業非道の罪多し深を臣寄らむ此明のうへ罪を加へぬ

べいと云愕然必し臣何由へ再び合戦を企つるぞや子細を尋ね

をいと後せあり付さ人々の女を公業方より返りゆれ翌日忽

逐電しそゆ来おぬをそと公業が不慮ありんと胡親うとくひの公

を生い懐を散びんる戦人と欲るしと公業かの女を引入まるとぬ

顔もく胡親と争論らるる有ヤドと存む世世大命よりと戻り

老て女立地よ出奔はるもその疑ひありふもあむ果しと公業女



小鹿島

橘次左衛門

公業

送返と圖

と申合せて斗る知るは非道の所納より急度召禁らば然
 へしと申上よりこれ和田左門尉兼盛小麻島公業と具員より
 小糸忌悪く兼盛の面目を失へんとす不効るより忌悪と申し
 ちし再兩人を召寄子細を尋ねんとす即時この兩人を召
 する兩人兼盛と今度と高聞よをせざるるも勝負と決せんとし
 りと申す御使又召りし違背と申すを能く是非あり
 再御所へ系候と兼盛もくつと申す御所より召寄りし子
 けんと伺ひる。是は兩人侍所より系上のより。一は召寄りし
 出させあり兼盛時よ命せらるるは兼盛時よ。云く其方共且下知
 と加えらる。如く。争論よかよひ合戦と企る条を恨ん
 ぬ。ちし似し。いづるは再度の騒動よかよひ。的白よ上より

しと有る付朔親と女が出奔のり以申す替候を交し。しと
 よしをお述る公業の部下知又従ひし。兼盛と申す。此の女逐電せしを
 が所為なりし。兼盛を云ふ害を突く。由へは兼盛よかよひ勝負を
 決せんと存る如く。全く是命を背さし。ちし。あはれ朔親兼盛
 よ合戦を企ゆる。勇士の習ひ手を束ぬ。非法の刃を交へし
 申す。兼盛。兼盛止むとと。泊る取らる。ゆと。申す。小糸兼盛時
 兼盛を父公業他の妾を拘居置めんと。先兼盛の中分明白あり。ちし
 ちし。兼盛。御憐愍を申す。弘明とも。遂らる。と。和平あり。め
 らる。如く。ちし。女逐電せし。朔親が疑を無理よ。あはれ殊に兩人
 の宿所軒を並べし。ちし。兼盛。旁めり。不審や。ちし。何れもせ
 よ上命を背き。私の着意を。ちし。合戦を企る。ちし。罪道と

かゝん殊よ公業家初の申分申しつゝざらるゝと罪科を収るべ
 け度小のわゝくハ用捨る。嚴重の礼明あるべし。申すは度
 とのひ友人も屈伏しつゝえたる如く和田左門尉兼益軍前より
 の始終をとりと笑済し頓ては傍近く罷出兩人が次第次第
 の兼業よ命せし下さるる存る子細もいへば明白に裁行仕る
 べしと申上るる悉く言ま元来兼業益諸士の列當るは申す
 ざるに知る事ども一旦下知をとりつゝる由へけ度も友人を臣奉
 る如あり。志つても渠等申す如く実否をちかかるとも兼業は
 べし。依怙の沙汰をいふとつゝいひ治さるべしと直に信せ渡さる
 べし。兼業益面目を施し有がくは靖よかゝる直よその坐よかゝる
 事と共と先藏人朝親に向ひけ度謙念中を強動うはしめしる

事。その根元を正辺の母女より起る如くは罪一人よ共とて
 そのありんといふは天恩と兼業の妻子安堵するを臣とる者一日
 も忘るべしつゝる如あり。その天恩をいふほど私の者兼業合戦を
 企て、その方をつりつゝ一族をつぐおろしつゝい争を助けしつゝと
 を食る国城とやりの忠義をいふ。件の女公業が方と在共
 その身の妻子といふはあはれ。他人のいふをいふ如くもあ
 らざれば穩便の仕法もいふつゝやども斗ひつゝあはれをいふ
 女何の如く公業が件と在ととの筋をいふ。兼業は倫
 人蜜夫のいふがや。兼業を束子土を塑し人なりとも。世
 く生根あるもの争うるを忍ぶべきや。兼業の逐電を愁傷し。途
 方を失ひ肝魂も安定する。兼業が件と在と笑や否忿怒



藏人
朝親
怒て
妻女
斬
國



一、此の罪科、愾々たる如く、又公業を最初女が入る、一、此の中
 てより、外は一、云々をも發せ、す、一、諸人を招き、集めて、大命を
 女を返し、和平をなす、一、身許を合戦を仕、け、色止る、を、
 防、ぐ、ん、と、さ、す、の、あ、ま、り、静、す、ら、ふ、に、公、業、の、で、う、強、動、を
 せん、わ、あ、ら、う、小、麻、島、を、罪、る、一、皆、そ、の、誤、り、を、い、や、ま、さ、さ、
 一、族、の、端、を、列、せ、ば、依、怙、の、斗、ひ、に、な、ら、ず、一、既、に、罪、科、か、の、ど、く、
 一、再、び、仁、問、よ、か、ぶ、と、ど、其、上、を、よ、り、ま、さ、く、強、動、を、企、む、に、於、て、
 一、所、帶、を、正、と、ら、ず、一、の、凡、定、を、承、知、し、ま、ら、ず、右、の、次、方、及、ぬ、
 一、又、中、所、く、と、知、り、と、言、語、論、弁、水、の、流、る、と、く、述、々、其、相、親、の、
 一、面、土、の、ど、一、云、半、句、も、出、ば、と、默、然、と、し、居、り、
 一、実、相、々、公、の、折、振、を、内、奏、を、禁、せ、
 一、

斯く、和、田、左、門、尉、を、益、系、の、御、前、と、さ、す、夫、の、智、や、付、べ、き、や、と、伺、
 一、と、其、方、が、罪、先、刻、より、論、じ、る、如、の、ど、一、よ、り、所、願、の、内、三、分、
 一、と、正、し、く、は、暫、く、出、仕、を、止、り、知、と、有、る、に、藏、人、相、親、を、身、
 一、と、算、ら、れ、赤、面、一、耻、入、る、在、ら、ず、一、禮、が、平、伏、し、清、精、を、や、る、美、盛
 一、公、業、を、向、い、の、方、儀、犯、す、科、あり、と、い、へ、ど、も、争、論、の、お、よ、り、再
 一、度、合、戦、の、用、意、よ、か、よ、止、り、を、は、ら、う、と、い、ふ、も、亦、く、思、慮、せ、
 一、付、は、ら、ぬ、と、い、ふ、方、あ、ら、ん、頗、る、不、測、法、と、い、ふ、べ、し、一、と、ら、く、閉、門、
 一、三十、日、出、仕、を、止、む、と、述、々、其、又、忍、入、る、情、を、各、々、水、家
 一、へ、退、步、と、実、相、卿、和、田、が、今、日、の、裁、判、利、非、明、白、と、い、ふ、一、同、然、と、い、
 一、ら、ざ、ら、ず、清、感、あり、一、小、麻、島、と、く、三十、日、閉、門、と、い、ふ、も、罪、を、さ、
 一、

取せぬわが。和田が潔白の捌とらふと限り。あつふふ小糸兼時よ
 と。和田が斗ふの片手あつふふとあひひくべ内と君へ十上大尉を改
 やしと改めしと勸めなれども君一旦信渡さるるうへと再びは
 法とさよあつふふととく。夫形よお済々もが兼時公中燃るがぶとく
 すくも兼盛よ怒を添るるうへ。胡親よは度知知と減さるる出仕
 を止るるも。さよあつふふが誤るるもが怒りうへく屈伏しと在るも内
 公よ兼盛懐くしと晴ど女があつふふのうへ一息よ公業が所為と思ひ
 空も明業公胸と胸と和よとの年も兼承元四年の春正月六日胡親
 が身ホ斗くとも彼を妾とえうけ。忽ち捕へて連来りたる胡親大尉
 恨ひ涙を捨る罪と怒りうへく怒を散せんと先拷問する如り元
 来不実者の賤女もは胡親が方と出公業よ拘居せりあつふふ在り

かつか騒動よあつふふ後一旦胡親が許へ返さるるも以前のでく小
 あつふふとあひひ再び直出するも。さよあつふふとあひひ匹夫
 下郎のめとあつふふのりと成る居るうへ今日鶴岡八幡(糸指)と
 び捕へらるる責問するも及ぶ。次第一白状せしむる胡親とわが
 今すくくの疑ひをさるる。後悔するも。妻女の子かとのひ公
 業があつふふ知城よ面目もさるる女憎さ弥増し恠かす。来来り
 命に終よ女と殊戮し。さよあつふふ実子公業と和乎よあつふふ兼盛
 逐せし。和とあつふふ雷てさるるうへ。さよあつふふ胡親公業が争論あつふふ
 騒動よあつふふとあつふふ。和田兼盛を夫郎し。夫く罪を正し漸静
 檻よつるもさるる武侍年若るうへと侮り。天道を思ふも。事あつふふ
 権門よ仗りさるる奥向の房方とあつふふと免さんとと兼盛とさるる所

ままが。向後を禁制めえしとく。改めく。下か有る冬は以後何る
 小く。げ。旃。招の。毛。去。臣。言。後の外より。執。奏。と。る。ま。あ。り。く。い。く。と。理
 か。う。う。こ。の。ふ。こ。も。急。度。曲。事。く。ま。さ。う。最。重。に。觸。ら。ま。さ。る。べ。し。羊
 強。ち。羊。盛。が。勸。め。し。せ。し。小。を。め。し。ひ。ど。も。小。糸。羊。附。を。和。田。が。旃。也。へ
 う。う。と。尼。御。臺。所。へ。云。上。せ。し。ふ。は。五。腹。あ。り。く。局。共。の。執。奏。を。制。せ。り
 る。い。水。口。入。を。止。め。ん。と。の。羊。の。ま。さ。し。武。將。若。年。の。万。事。小。し。う。て。君
 の。筋。あ。る。小。し。う。く。右。幕。下。の。所。附。見。笑。し。う。る。う。ど。め。と。告。す。以
 の。ま。り。あ。う。う。う。羊。盛。を。拒。と。止。め。ん。と。勸。む。る。と。老。臣。の。志。ま。り
 募。り。志。を。怪。ん。ど。る。知。あ。り。と。深。く。恨。と。憎。と。あ。り。し。う。く。羊。盛。精
 忠。の。故。も。悪。め。る。ま。り。う。い。且。し。う。ど。ど。呼。あ。り。用。ひ。あ。り。た。い。く
 和。田。小。糸。不。快。と。あ。り。し。と。是。非。も。あ。り。形。勢。あ。り。鎌。倉。の。執。權。老。臣

する。兩。入。う。る。確。執。と。あ。り。若。し。御。若。年。小。や。し。く。御。母。尼。公。左。や。右
 斗。ひ。あ。ん。ど。も。発。明。あ。り。く。女。性。の。事。奉。在。國。勢。に。乾。く。正。し。う。く。あ。り
 とも。ま。し。天道。も。こ。を。悲。と。あ。り。や。け。程。天。變。頻。あ。り。く。雷。電
 地震。亦。う。ら。發。き。大。爪。大。雨。浪。を。揚。め。り。し。社。頭。を。損。し。民。衆。を。西。復
 一。式。と。海。峽。の。渾。水。を。漂。と。就。中。今。承。元。四。庚。午。年。九。月。晦。日。戊。の。刻
 ぐ。う。う。西。の。方。異。星。現。れ。天。市。垣。第。三。星。の。傍。に。在。る。の。芒。光。東。の。方。小
 一。三。尺。有。奇。芒。光。折。射。燦。り。く。壹。丈。許。小。至。る。諸。人。を。多。と。怪。む
 如。し。十月。二。日。京。都。の。飛。勝。系。着。し。今。般。彗。星。現。れ。う。り。し。く。公。卿
 評。議。の。う。り。内。外。の。所。祈。禱。を。終。り。と。進。進。と。う。く。鎌。倉。も。も
 諸。寺。諸。社。に。命。し。く。國。永。平。安。を。祈。ら。し。あ。り。今。年。十。一。月。廿。五
 日。土。御。門。院。所。位。を。太。子。に。讓。り。し。十二月。廿。六。日。土。御。所。位。八。十。代



帝順德院と申なるを以て先帝を新院と稱し翌年改元有て建
 曆元辛未年とある去年の天変上御一人より下萬民のつらき
 事ありて世に静謐とす安堵の如くはとありて當未
 年の六月秋後國三味の庄の願家難平の折居ありて鎌倉より出府し
 大金谷の辺なる民家より旅宿して在り或曉強盜刀劍を振て押
 入家内の男女を縛り旅人を殺害し旅装資財と同類とす小
 憲く奪ひ去りて子孫に折へ出さざらん和田平次景春
 とつひ吟味せしむり高の幸以て件の次無人に地代代の家
 人と又精いものとも徒黨を結ひて帯刀して理不尽に押り
 家内の者どもを縛り重客人を殺害し財宝を奪ひ去りて申
 平次景春の友人立ゆりては飯を申す申す平次景春とて地代

代を同道とす一と下知らざるも則彼所の地代を引連侍所
 より申す事直に糾問する地代代を糾問し何事も存せ
 ざらん陳ト申す事直に糾問する地代代を糾問し何事も存せ
 と糾問非法のるは或るがや殊に尋常の盜賊よりいふに申す
 くの狼藉之案内あるを申すは叶はざる事あり汝が日頃の政道嚴重
 ありんば争り理不尽の働するべき平常寛綽の意あるに無徒上
 を忍びざる申すの言新よかよふか汝が誤る事やわづらる大なる出
 ありとも存せざる事ありその方罪ありとありや聊ある支配を
 作らざるありや何ぞ地代職とすべし國に盜人あり或る角有
 といふことも上よまりの社号令を下しちりしむる付て盜人も間を
 伺ふ事ありはざるものありをを以て日頃をわたりは罪女らに

